

四月心光寺定例聞法会のご案内

- ＊期 日 平成十五年四月十六日(水曜日) 《＊毎月十六日》
- ＊時 間 十六日(昼席)午後一時三十分より (夜席)午後七時より
- ＊会 場 (昼席)心光寺本堂 (夜席)心光寺庫裏
- ＊講 師 大石 法夫 先生(広島市在住)

心光寺からの便り

里のあちこち、山々のあちこちが桜の花に染まり始めました。畑には菜の花がこぼれるように咲きみだれて風に揺れています。由布の山里も、今ようやく春一色に染まろうとしています。皆様いかがお過ごしでしょうか。

◇さて、去る三月十六日、お陰さじゅうしよくけいしよくほうよう とどこおまで住職継職法要を滞りなく終了することができました。前日と当日、早朝から準備、終了後の後片付けと、法要を陰で支えてくださいました総代さん方。またその奥さん方。そして婦人会の役員の皆様方。それから当日お忙しい中をご参集くださいましたご門徒の皆様方。更には遠く北海道や岐阜をはじめ、県内外からはるばるお越しくださいましたお同



心光寺住職継職法要の様子(平成十五、三、十六)

行の皆様方。そして当日の記念法話と翌日の彼岸の法話のために、前日から二泊三日の日程でおいでくださいました大石法夫先生。このように多くの方々のお骨折りで、ようやく実現することができた住職継職法要でした。心からお礼を申し上げます。

今日のスナップ写真を広げて、お参りくださった方々のお姿を拝見させていただきました。つくづく、勿体ないことだなあ。当たり前ではないなと思いました。

実は住職継職という出来事そのものが、個人的なことではないということに改めて思います。お一人お一人のお姿の背後に、住職の継職という出来事に寄せる深い願いを感じます。その本源は阿弥陀如来の本願から発しているといわざるを得ません。そのことを思い、合掌念仏の他はありません。

◇ここで法要の時に述べた「表白」の一部を、少し長くなりますが引用させていただきます。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
謹んで、救主阿弥陀如来、また教主釈迦牟尼仏しやくわむにぶつ、さらには宗祖親鸞聖人、また本願念仏の教えを今日まで受け継ぎ伝えてくださいました善知識様方に申し上げます。

去る平成十四年十月二十八日、私は本山・真宗本廟ほんじょうの宗祖親鸞聖人のご真影しんえいの御前で、ご門徒の皆様方の代表であります総代長の杉田百隆さんに見守っていただく中、当山心光寺住職の任命を受けました。そして本日ここに、ご尊前しょうぜんを荘厳しょうこんして、ご門信徒の皆様方、有縁うえんの法中方ほつちゆうがた、そして大石法夫先生、さらには大石先生の教えを共に聴聞させていただいています県内外の同行の皆様方に見守っていただく中、当山心光寺第十四世住職の継職式ついでを執り行わせていただきます。

本山における住職任命式は、最初宗務総長から住職任命の辞令をいただき、その後辞令を手にしたまま親鸞聖人のご真影しんえいの御前まで進み、そこでもう一度深くお礼をして、改めて辞令をいただきなおすものでした。私はそのようにし

て親鸞聖人の御前で深く頭を下げた時、その辞令は親鸞聖人から直接いただいたものだとの念が突き上げてきました。

実は住職任命の申請をするに当たって、申請書に、「就任に当たっておもうこと」について書く欄がありました。そこに私は、

「心光寺を如来様から預かった念仏の道場としていただき、ご縁のある限り如来様の御用を果たさせていただきたいと念じています」

と書かせていただきました。実際に辞令をいただいて自分の座に戻り、もう一度ご真影を拝した時、改めてそこに書かせていただいた言葉を思い起しました。そして、心光寺は、私の生まれた寺であっても私のものではない。如来様と親鸞聖人から、

「如来の御用を果たすために、心光寺を念仏の道場としてお前に預けた。そこで念仏の教えを、これからご門信徒の方々と共に命をかけて聞いていきなさい」

そう直接命じられて預かった寺だということを改めて確認させていただきました。あたかも親鸞聖人が実際にそこにおわして、そのように語りかけておられる如くに感じられました。

(中 略)

その後不思議なご因縁を得て、平成十三年三月、春季彼岸会に広島市から大石法夫先生においでいただき、二日間のご法話をいただきました。以来毎月十六日に大石先生にご出講いただき、定例聞法会をお勤めさせていただいて今日に至っています。あたかも装いを新たにされた心光寺の庫裏と本堂に、大石法夫先生によって、念仏の道場としての魂を入れていただいたかの如くです。

このように大石先生にお出遇いし、ご門信徒の皆様方とともに、日々生きて働く念仏の教えを身近に聴聞できるご縁をいただきました背景には、大変なご苦勞を重ねて心光寺を今日まで支えてこられたご門徒の無数のご先祖の方々、また時に風前の灯となる中、今日まで法灯を伝えてくださった住職先祖の方々、また深い願いが働いていることを思わざるを得ません。そのような今は亡き無数の方々の願いが、声無き声として、今この本堂の中に脈々として生きて

おり、叫んでいることを感じます。そしてその願いは、そのよって来たる本源を尋ねれば、阿弥陀如来のご本願から出ていることを教えられます。

本日ここに心光寺住職の尊い仕事を拝命するに当たって思いますが、師の大石先生が今日もそうなさっておられますように、私もまた、このような無数の方々の願いを押し頂き、それを通してご本願の不思議なお力を拝し、それに護られ、使っていただければ、そのことを謝したてまつる。願わくばそのよな生き方をもって私のこれからの生涯を最期まで全うしたいということでもあります。そして住職任命申請書の「就任にあたって思うこと」に書かせていただいた言葉、

「心光寺を如来様から預かった念仏の道場としていただき、ご縁のある限り如来様の御用を果たさせていただきたいと念じています」

この言葉を忘れず、これからも繰り返し胸に刻み、ご門信徒の皆様方と共に、命のあらん限りこの身に本願念仏の教えを聞き抜いてまいりたいと思えます。時に平成十五年三月十六日、撰取山心光寺第十四世住職 釈文隆、阿弥陀如来のご尊前に伏して、諸仏如来のご照覧と護持養育を請い願いたてまつります。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

私がこの度の継職法要をこのような精一杯の気持ちをお迎えすることができましたのも、大石先生に出遇ったお陰です。大石先生が本願に生きる生活とはどのようなものかを実地に見せてくださり、教えてくださったお陰です。大石先生にお出遇いすることのできた因縁の不思議は、本当に謝しても謝し切れません。

◇さて住職継職式では、まず前住職の挨拶がありました。昭和二十四年、心光寺に養子に來た当時のこと。翌二十五年に住職になって以来五十二年間の出来事。また今回無事次代に引き継ぐことができた喜び等について、時にこみあげるものを抑えながら話しました。

私はその話を聞いていて、子供の頃のある一こまをふと思い出し胸が熱くなりました。それは小学校一年生の時でした。

「今度のPTAの参観日に、皆さんの絵を教室に貼ります。それで家の仕事の様子を絵に描きましょう」

そう先生が言いました。その時私は、山で炭焼きをする父母の様子を描いたのです。家の仕事といえば寺です。親としては法務に従事する様子を描いて欲しかったと思います。しかし実際は寺が小さいので、生計維持のため父母はいろいろなことをしていました。その一つが当時炭焼きだったのです。子供の目には、その頃の親の仕事といえば、炭焼きと映ったのでしよう。

「絵を見たときもう顔が真っ赤になったよ」

参観日から帰った母（故人）が、笑いながらそう父に話していたのを思い出します。

このようにして、父母は苦勞しながら寺を維持し、私たち子供三人を育ててくれたのです。しかしその大元には、父母が私を人としてこの世に生んでくれたということがあります。そのことによつて、今日私は大石法夫先生に出遇うことができたのです。さらには大石先生を通して弥陀の本願に出遇わせていただいたのです。

住職就任の挨拶では、前任職に対するお礼の言葉の中で、先ずそのことを申しました。そして藤解先生の里帰りのお話を少しだけしました。実はこのお話は大石先生からしばしば聞かせていただいたのでした。すると午後の記念法



心光寺住職継職式に臨まれる大石法夫先生
と同行の皆様方

話の中で大石先生がこのお話を取り上げ、詳しく話してくださいました。大変胸を打つお話でしたので、それを次にご紹介します。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
「本当に信心が明らかになったらもう、先ず第一に、よう人間に生んでくれましたと、親のご恩を思えるようになるぞ」

学苑がくえん（六光学苑ろくこうがくえん）に入る前に寺のお説教で、藤解先生とうげからこう聞かせていただきました。驚きましたよ。金持ちの子に生んでくれたとか、健康な子に生んでくれたとか、美人に生んでくれたとか、そういう条件をつけない。ただ生んでくれただけ。

世間ではお金持ちになったとか、国会議員になったとか、町長になったとか、そういう喜びでしょう。貧乏とか病気になったら喜びはしませんよ。だが藤解先生は、どんな状態でも条件をつけず、ただ人間に生んでくれて有難うございますと。

実際に家族を連れてお礼に帰られた。藤解先生とうげの出生地は瀬戸内海の島です。竹原から船で一時間くらいの所にある大崎上島おおさきかみしま。お父さんは明治の頃は寺子屋をしていて、後にそれが学校になった。山の学校でね。そこで先生をしておられたそうです。非常に経済的に苦労されたと聞きました。

「親とは不思議なもんど。わしの下駄の音を聞いて『あつ、あきらさんが帰った』と。下駄の音を聞いただけで、はっとわかるんだ」と。

そんな一言一言が心に残っているんですよ。

「お父さん、お母さん、今日はお願いがあって帰りました」

「何か」

「どうか床とこの間の前まで、こつちを向いて座ってください」

理由を言わずにそう言われた。お父さんお母さん何かあると思うて言う通りにされた。藤解先生、奥さん、お子さんの三人は、三間続きの部屋の一番手前の部屋に並ばれた。そして合掌されて、

「お父さん、お母さん、よう私を生んでくださいました。今日はお礼に帰り

ました」

そう言うて、拝まれたそうですよ。そしたらお父さんお母さんが、一言も言わずに涙をぼろぼろこぼされた。

「もうそれでよろしいです。楽にしてください」

その後茶の間に行つて、お茶を飲みながら話した。

「わしは一代学校の先生をしたけど、あんたに負けたよ」

そうお父さんが藤解先生に向かつて言われたそうです。

「いろんなことを教えたけど、親に向かつて『よう生んでくれました』と拝むということは、よう教えんかった」と。

人間じゃ、よう教えませんよ。

それから藤解先生は、

「明日は早う出ますから、寝とってください。暗いうちに出て行きますから」
ところが翌朝台所でごそごそ音がしておる。起きてみたら、ちゃんとね、お父さんお母さんが正装されて、

「まあ一杯飲め」

盃一杯だけね。そして家を出るときに、冬でね、お父さんがこうもり傘の柄えをこうやって「ハァー」と温めてね。もう子供じゃやないんだ。立派な大人になっておる。それなのにね、幼子みたいに父親が柄えを温めて渡された。そういうことまで話されました。

後ろを振り返つたら、ちようちんを振つておられた。

「わしはのう、波止場はとばに着くまで泣き泣き歩いた。船に乗つてもものう、みんなは座つておるが、わしは船の手すりの所に立つて泣きよつた」

そういう話が沁しみ込んでいます。

そういう親子の通いでしょ。それが学苑がくえんに入る前、藤解先生から感銘を受け
て聞かせてもらったことでした。今日文隆さんのお話を聞いていて、ひよつと
それを思い出しました。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

何遍聞いても感動せずにはおられないお話です。

私は大石先生に出遇うことのできた因縁の不思議をしばしば思います。その因縁は無数に網の目のような広がりを持ち、はるかな過去から今のこの時まで連綿れんめんと続いています。どんな小さな出来事も、今日に至るためには無くしてはならぬものです。その最も大きなものの一つが、人間に生まれさせてもらったということです。父母がいなかったら私は人間に生まれることはなかったのです。そこに父母の最大の恩があります。そのことを藤解先生のお話は教えてくださいます。

中国の善導ぜんどう大師だいしがお書きになったものの中に、次のような言葉があるのを思い出します。

「既に身を受けんと欲するに、自の業識ごうしきをもって内因となし、父母の精血をもつて外縁げえんとなす。因縁和合するが故にこの身あり。この義をもつての故に父母の恩重し」(『観経疏 序分義』)

ここで注目しなければならないのは、「既に身を受けんと欲するに」という言葉です。つまり私が人間に生まれたのは、何としても人間に生まれるたいと私が願ったからだと言われるのです。

「勝手に生みやがって」これは子供が親に向かって投げつける言葉の代表的なものです。しかし仏法に照らせば、それは大きな間違いだということ。むしろ父母は、何としても人間に生まれたいという私の願いをかなえるために、そのご縁となってくださったのです。いくら人間に生まれたいと願っても、父母がいなかったら、その願いは決してかなわなかったのです。「この義をもつての故に父母の恩重し」この点にこそ、父母の恩の一番根本があると善導ぜんどう大師は教えてくださいます。

苦勞して育ててくださった恩も全てそこに収まっていきます。場合によっては産んですぐに親が亡くなることもあります。中には産んだ後捨てる親もあります。そんな場合は親の恩はないのか。いや。そんな場合でも「この義をもつての故に父母の恩重し」そう善導大師はおっしゃるのです。

◇大石先生はまた記念法話の中で、就職を取りやめて出家を決意した時のこと。その時のお父さんとのやりとりの様子について話してくださいました。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
ほんとは私は一ヶ月ほど妙心寺へ入って雲水の生活をしたいと思うておった。だが一遍本物に遇うたら、「あつ、ぼやぼやしておったら間に合わん。一ヶ月も妙心寺へおったら大変だ。その間に亡くなられたら大変だ」と。

そこで早速荷物をたたんで郷里へ帰りました。そして藤解先生に「弟子にしてください」と頼んだ。

「だが大石さんのう、わしの所に来てものう、わしの境地まで来れんやらわからんぞ。途中で死ぬかもわからんで」

と言われました。腹を決めさせるためですよ。それから、

「わしがあんたを引っ張ったと思われたら迷惑するぞ。わしがあんたを取ったと思われるから」

「その点は私が親に申します。自分の意志で行くんですから」
家に帰った私は父の所に行つて言いました。

「お父さん、私はお坊さんになつてはいけませんか」

家は醤油醸造業。田舎でね。父は樽たるの側そばで作業をしておりましたよ。父はそうして働いて、男三人、女四人を学校へやってくれた。人を雇やとったら人件費がかかるから、朝二時に起きて仕事をした。「みんなが起きるまでに一人前の仕事をわしはしとる」そこまで苦勞して学校にやってくれたんですよ。その親に向かつてそう言ったんです。そしたら、

「お前を僧侶にしようと思うて大学にやったんではない。僧侶になるなら、僧侶の学校があるじゃないか」

と、顔を真っ赤にして言いましたよ。私はばつと場を去りました。

その日は岩国に藤解先生が説法に来ておられた。そこで夜席を聞きに行った。終わって自転車をこいで家に帰ったら、夜中の十一時過ぎです。母が電灯の下でこうやってね、考え事をしていた。母の表情がいつもと違う。

「どうかしたんですか」

「法夫さん、あんた今日の昼お父さんに、お坊さんになっちゃいけんかと言
うたでしょう。さっきお父さんがね、法夫がこう言うたと言ってね。目の黒い
内は絶対に坊さんにさせんと言っていた。あんたね、日曜日にお説教聞きに行
っちゃいけんのか。ちゃんと就職してから」

と言いました。私は母に向かって、

「お母さんだけは喜んでくれると思うたが、あんたまでそう言うんですか」
と言いました。そして

「あんたを泣かせてまで行こうとは思わん。行くのはやめます」
そう言うた。

だが一遍芽生えた生死解脱しやうげだつの道。いつかは死ぬんですから、そんな時また後悔
したら、父を恨まにゃいけん。自分の意志で入ったのなら、途中で挫折させつして死
んでもね、誰にも責任転嫁てんかせんですむ。どうしても私は、父に縁を切つてもろ
うても、自分の願いの通りに行こう思うて、一週間たつてもう一遍父の前に行
きましたよ。

「お父さん、あなたは目の黒い内は坊さんにさせんと言われたそうですが、
今でもそうですか」

「いや、大学を出すまでが親の責任よ。それから先は、わしはどうもようせ
ん。自分の道を自由に行け。じゃがのう法夫、親じゃけえのう、何かあったら
相談をしてくれえのう。」

今でも思い出すと、ぐっとくるんですよ。

「恩愛おんないはなはだちがたく

生死しやうじはなはだつきがたし

念仏ねんぶつ三昧さんまい行じてぞ

罪障ざいしょうを滅めつし度脱どだつせし」

恩愛おんないというものはなかなか絶ちがたい。それを絶たにゃいかれませんかよ。そ
の辺がねえ皆さん、生死解脱しやうげだつの道を進むには、人生岐路きろ。乗るか反そるか。
まあそういうことがあります。寺へ入れていただきました。

◇

◇

◇

◇

◇

苦勞して育ててくださった両親への思いの深さが、切々と伝わってきます。しかし恩愛の情に流されてこの道に進むのをあきらめたら、後で親を恨まなければならぬことになる。そう決心された時、大石先生の中に芽生えていたものは、この世を超えたものであったと思います。その時大石先生は二十六歳。二十六年の人生だけではとても説明のつかない、久遠劫来の背景をもった心が動いていたのだと思います。

実は大石先生が就職を取りやめ、婚約も取りやめて出家するということになった時、親族会議が開かれる事態となりました。その席で意見を求められた藤解先生は、こう言われました。

「私には意見はありません。法夫さんの願いが仏様のみ心に叶うなら、誰が反対しても、自然にそうなるでしょう」(『生まれてよかったですか』百十六頁)

この時藤解先生は大石先生の中に芽生えた心が、この世だけのものではないことをはっきりみておられたのです。この心は王城を出られた釈尊、九歳で出家された親鸞聖人、海を渡った道元禪師に動いていた心と同一のものでしょう。そしてこの心は、国を棄て王を捐て一介の沙門しゃもんとなった法蔵菩薩ほっしんの発心の物語に象徴されている心です。すなわち一切衆生の中に流れている心です。

こうして大石先生は、親子の縁を切られても仕方がないと心に決めて、お父さんの所へもう一度行きます。その時お父さんが言われた言葉は、息子に対する愛情の深さがあふれていて、胸打たれます。

そのお父さんのご恩を偲びつつ、
「恩愛はなはだちがたく　　生死はなはだつきがたし

念仏三昧行じてぞ　　罪障を滅し度脱せし」

この和讃を引用された大石先生の胸中を思います。そのような親子間のやり取りの全体が、念仏、すなわち如来の本願に深く念じられている中での出来事に他ならない。そのように私は受け止めさせていただくのです。

大石先生から聞かせていただいたこれらのお話は、これから人生のさまざまな場面で思い起こされ、私の行く手を照らす燈明の一つになってくださるに違いありません。

◇このお話に続けて、大石先生は次のようなお話もしてくださいました。



人間いかに生きていったらいいか、どういうことが本当の生き甲斐かということとは、みんな一人一人の宿題ですよ。世間的には国会議員になったとか、大臣になったとか言いますが、人がくれた値打ちでしょう。信心いただいて浄土往生という道が始まったらね、人がくれた価値とは違う。人からけなされたら元気をなくす。金がなくなったら自殺する人もあります。世間はそうですね。人がくれた価値。ノーベル賞ももらったとか、逆にあんなものはつまらんとかでないにね、如来が信じられたら、信ずるの中に、みなこのままでいいというね。

今日、この時間、この場所、この姿。そこに条件つけずに落ち着けるんですよ。

さつき申したでしょう。人間に生まれたこと自体が喜べると。家柄のある子に生まれたとか、金持ちの子に生まれたとか、そういう条件をつけんままに、生まれたこと自体を喜べて、親にお礼が言えると。

学苑に入る前に、藤解先生から最初にそのことを聞かせていただきました。そんなことが言えるだろうか、驚きました。



たとえそれがどのような状況であろうとも、信心をいただいたら、今日、この時間、この場所、この姿のまんま、一切の条件をつけずに落ち着けるとおっしゃっておられます。

何と広い世界でしょう。私はこのお言葉を聞いたとき、「念仏者は無碍むげの一道なり」という『歎異抄たんにしやう』第七章の言葉を思い出しました。また第一章の「悪もおおそるべからず。弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえに」という言葉も思い出しました。

悪とは、「罪悪深重、煩惱熾盛ぼんのうしじやう」のわが身ということでしょう。いかにわが身の罪悪が深かろうと、本願をさまたげるほどの罪悪はないということです。このような本願の広大な心に遇ったとき、始めてそれまでの善悪の心から解放さ

れて、わが身に無条件に落ち着くことができるのです。

この「悪」には、私の出遇う状況。私の思いでは逆境としか思えないような状況。それをも含めていただいても間違いではないでしょう。いかなる状況であろうと、弥陀の本願をさまたげるほどの状況はないということです。まさに「念仏者は無碍の一道なり」です。

◇大石先生は法要の前日、三月十五日の夕方、心光寺においでになりました。

実は先生は、三月十二日は広島のご自宅での法座。翌十三日から十四日にかけて三重県松林寺（森英雄住職）での法座。そして十五日から十七日までは当院での法要というふうに、大変な過密日程をこなしておられました。

三月十五日。先生が来られる少し前、三重県の森さんから電話がありました。大石先生が十二日のご自宅での法座の後、風呂から出られたところで倒れられたということです。心配された奥さんやご長男の朗さんが、翌日からの三重県行きは見合わせた方がよいのではと先生に話されたそうです。しかし先生は言下に断られて、予定通り三重県に行かれたそうです。そういうことがあったことを一応頭に入れておいてくださいとの電話でした。

三月十五日の夕刻、大石先生は予定通り当地の湯平駅に到着されました。お迎えに行った車の中で、森さんから電話があったことを伝えて、容態をお聞きしました。すると先生は、貧血体質が原因なので心配はないと話されました。そして、

「本願の話をするのだから、出かけた方が元気になるよ」

「旅先で死ねたら本望よ」ほんまう

こう言われました。先生は最期の最期まで、本願に生き切ろうとなさっておられるのです。旅先で死ぬことはもとより覚悟の上なのでした。

また、倒れた後寝床に横になった時、ふっと旧制高校の時習ったカントの最期の言葉が頭に浮かんだと話されました。それはドイツ語で、「それでよい、それでよい」という意味の言葉だそうです。その言葉を原語でふいに思い出されたそうです。

「その時不思議に、これでいいんだという安心感があつた。不思議に心は安らかだった」
そう話されました。

どのような状況にあつても、念仏をいただいたら、今日、この時間、この場所、この姿のままに落ち着けるといふ先のお言葉。これを先生はこのような生活の中の具体的な経験を通して、見せてくださるのです。

このような突発的な出来事。その中で先生がどのようなことを感じられたか。さらにそのことについてお話しくださる言葉の数々。それらの全体が生きて働く教えです。血を持ち、心臓の鼓動を伝えながら、私に働いてくださる生き物としての教えです。単なる教理の言葉とは違うのです。

このような生き物としての教えが、どれほど私どもの行く手を照らす燈火になつてくれるか知れません。先ほども述べた通りです。

何よりも大石先生自身が、藤解先生の上に現れた、そのような生き物としての教えの数々に照らされつつ歩まれる人です。今も現にそうです。そのことを先生のご法話や常のおおせから、確かに感じることができます。

◇住職継職法要の翌日は彼岸の法話でした。その法話の中で大石先生は、

「住職継職法要は昨日で終わりました。しかし本当の継職はこれからです」

「みんなそれぞれの業をかかえて生きています。その中を本願に乗せられて越えていってほしいです」

このような意味のことをおっしゃいました。それが心に残っています。

私にもその業があります。念仏に立たなかつたら、誰しもこの業の中を越えていくことはできません。人情や一時の感情で越えられるほど、この人生は甘くはない。それを思い知らされることしばしばです。

念仏申すとは、私が念仏することではありません。念仏とは、私への仏からの呼びかけ。はるかな昔から絶えず私を念じてやまない仏の呼びかけ。願に帰れ。願に帰って願を生きよとの仏の呼びかけです。業に躓つまづくことを通してはその呼びかけに立ち返り、聞きなおし、応えていく。それが念仏申すことの内容

なのでした。

法要もようやく終わった十八日。再び仕事につく通勤途上の列車の中で、しみじみそのことに気付かせていただきました。私の内からのその如来のよびかけのみが、諸々の業を持ち煩悩を持って生きるこの身を、深く受け止めて歩ませてくださいる力なのでした。

◇最後に、去る三月三十一日、大石先生が家内にくださったお手紙の結びの言葉をご紹介します。今も現に願に生きつつある大石先生の全てが、この最後の一句に収まっていることを感じます。味わうほどに凄^すさを感じる一句です。この一句に出遇っただけでもう充分です。

「今日は、私は今から道路の掃除にゆくつもりです。家内は今買物に出ました。家は静かです。明日は四月一日。法座の準備をします。

私はこうして、一刻々々が始まりです。そして一刻々々が終わりです。」

常に「始まり」をいただくのですね。いつでも。どんな事態になっても。

南無阿弥陀仏

宮岳文隆拝

平成十五年四月十日

撰 取 山 心 光 寺